

メッセージアウトライン 出エジプト記13:17~14:31 「紅海を渡る」

子羊の血の塗られていないエジプト人の家の人も家畜も、その初子が神に打たれてみな死ぬという恐ろしい過越の出来事によって、ついに心頑なであったエジプトの王ファラオもイスラエル人が出て行くことを許し、追い出すようにしてエジプトから出て行かせた。イスラエル人は居住地であったナイル川河口東部のラメセスから旅立ち、そこから南東に約50kmのスコテにまで進んだ。(12:37)

[13:17-18]「さて、ファラオがこの民を去らせたとき、神は彼らを、近道であっても、ペリシテ人の地への道には導かれなかった。神はこう考えられた。『民が戦いを見て心変わりし、エジプトに引き返すといけぬ。』それで神はこの民を、葦の海に向かう荒野の道に回らせた。イスラエルの子らは隊列を組んでエジプトの地から上った」

「ペリシテ人の地への道」とはエジプトから地中海沿いに北上しカナンの地に上る最短の道であるが、その地中海沿岸の地域にはペリシテ人が住んでおり、その地にイスラエル人が入って行って戦いになったら、戦いの用意がない彼らが恐れて、心変わりをしてまたエジプトへ戻ることがないようにと神は配慮され、その道ではなく、葦の海(紅海)に向かう荒野の道へと導かれたのである。

イスラエルの民が約束の地へ入るためには十分な時間をかけて準備、訓練されることが必要であり、主なる神はそのことをよくご存じであった。

[19]「モーセはヨセフの遺骸を携えていた。それはヨセフが、『神は必ずあなたがたを顧みてくださる。そのとき、あなたがたは私の遺骸をここから携え上らなければならない』と言って、イスラエルの子らに堅く誓わせていたからである」

モーセはこの出エジプトにあたって、かつて先祖ヤコブの最愛の息子であり、エジプトの宰相となって、イスラエルを飢饉による滅亡から救い、エジプトに彼らを定住させたヨセフの遺骸を携えてきた。これはヨセフの遺言であった。→創世記50:24~26(彼の遺骸はミイラにされ棺に納められていた)

[20-22]「彼らはスコテを旅立ち、荒野の端にあるエタムで宿営した。主は、昼は、地上の彼らを導くために雲の柱の中に、また夜は、彼らを照らすため火の柱の中にいて、彼らの前を進まれた。彼らが昼も夜も進んで行くためであった。昼はこの雲の柱が、夜はこの火の柱が、民の前から離れることはなかった」

「エタム」…スコテよりさらに南東へ約30km下った地と思われる。

イスラエルの民はこの主が臨在される雲の柱、火の柱を見て、神が共におられることを実感しつつ、これからこの柱に導かれて、旅を続けて行くのである。

[14:1-4]主はモーセに告げられた。「イスラエルの子らに言え。引き返して、ミグド

ルと海の間にあるピ・ハヒロテに面したバアル・ツェフォンの手前で宿営せよ。あなたがたは、それに向かって海辺に宿営しなければならない。ファラオはイスラエルの子らについて、『彼らはあの地で迷っている。荒野は彼らを閉じ込めてしまった』と言う。わたしはファラオの心を頑なにするので、ファラオは彼らの後を追う。しかし、わたしはファラオとその全軍勢によって栄光を現す。こうしてエジプトは、わたしが主であることを知る。」イスラエルの子らはそのとおりにした。

「ミグドル」…塔または、やぐらの意味で、大きな塔の立っていた場所であろう。場所不明。

「海」…紅海のことであろう。「ピ・ハヒロテ」…ハトホルの家、掘割の口、村、エロテの口などと様々に訳されている。紅海北部の苦湖、またはティムサ湖の近辺と思われる。

「バアル・ツェフォン」…北のバアルの意味。地中海に近い場所ではないかと思われる。シリアのバアル礼拝がエジプトに取り入れられ、このような名がついた場所で礼拝されていたのであろう。

これらの場所が特定されていないので、出エジプトのルートは聖書学者の間でもいろいろと意見が分かれている。しかし、2～3節から分かることは、そこは海に面した荒野であり、袋小路のような場所であつたらしい。なぜそんな所にイスラエルを導かれるのかと言え、主がその場所で再び心を頑なにして追跡してきたファラオとその全軍勢を通してご自身の栄光を現され、エジプトはこのお方こそ主なるまことの神であることを知るようにためであった。

「栄光」…神の卓越したすばらしさ、輝き。

[5-8] 過越の恐ろしい出来事の後、イスラエルの民全員がエジプトを出て行ったということがファラオに告げられると、ファラオとその家臣たちはまたも民に対する考えを変え、心を頑なにした。主が言われたとおりである。ファラオはえり抜きの戦車六百とエジプトの全戦車にそれぞれ補佐官をつけて率い、イスラエルを追跡したのである。この時はまだエジプト軍追跡のニュースは伝わっていなかったので、イスラエルの民は臆することなく、主が示された方向へ進んでいた。

「戦車」…馬が引く二輪車のようなものであろう。

[9-10] ファラオに率いられたエジプトの精鋭戦車部隊はついにバアル・ツェフォンの手前にあるピ・ハヒロテで海辺に宿営しているイスラエルに追いついた。しかし。追いついたといっても、それは遠くから砂煙をあげて近づいてくるエジプト軍をイスラエル人たちが見つけたというほどの距離であつたであろう。それでも、それを見たイスラエル人たちは非常な恐怖に襲われて、主に向かって叫んだ。

[11-12] そして次の瞬間にはその矛先は目に見える指導者であるモーセに向かっていた。彼らは恐れから口を極めてモーセを責める。「エジプトには墓がないからといって、荒野で死なせるために、あなたはわれわれを連れてきたのか。われわれ

をエジプトから連れ出したりして、いったい何ということをしてくれたのだ。エジプトであなたに『われわれのことはかまわないで、エジプトに仕えさせてくれ』と言ったではないか。実際、この荒野で死ぬよりは、エジプトに仕えるほうがよかったのだ」

ここには皮肉、当てこすり、不信仰が満ち満ちている。このイスラエル人の態度は目の前の状況だけによって霊的状态が左右される人の典型的な型である。これは主なる神が過去から今に至るまで、どのようなみわざをなしてくださったのかという感謝の思いと、これから何をなして下さるかということへの信頼と信仰というものが欠如している状態である。この時のイスラエル人たちの反応はすべての信仰者たちへの警告である。(調子がいい時だけ神に従う)

[13-14]それでモーセは民に言った。「恐れてはならない。しっかり立って、今日あなたがたのために行われる主の救いを見なさい。あなたがたは、今日見ているエジプト人をもはや永久に見ることはない。主があなたがたのために戦われるのだ。あなたがたは、ただ黙っていなさい」

最大の危険に直面して恐れ、動揺しているイスラエルの民に対してモーセはまず「恐れてはならない」と呼びかける。(これはこれから繰り返し語られていくことばである) それくらいなら誰でも言えると思うかもしれないが、モーセのことばは空元気でなく、ちゃんとした根拠があった。それは「主があなたがたのために戦われる」であった。イスラエル人自身が武器を取って戦う必要はなく、主ご自身が戦われる。イスラエル人は今日見ているエジプト人をもはや永久に見ることはなくなる。だから黙っていなさいというのである。しかし、いったいどうやって主は戦われるのか。

[15]主はモーセに言われた。「なぜ、あなたはわたしに向かって叫ぶのか。イスラエルの子らに、前進するように言え。」モーセは民に「恐れるな」と呼びかけた後、今度は主に向かって熱心に叫ぶように祈ったのであろう。すでに主はモーセに4節で「ファラオとその全軍勢によって栄光を現す」と言われたが、モーセは今、どうかそのようにしてくださいと叫び、祈っていたのであろう。それで主はモーセの叫びを聞き、「イスラエルの子らに前進するように言え」と言われたのである。しかし、前進すると言っても前は海である。そのまま行けばおぼれて死んでしまう。

[16]しかし、続いて主はモーセに「あなたの杖を上げ、あなたの手を海の上に伸ばし、海を分けなさい。そうすれば、イスラエルの子らは海の真ん中の乾いた地面を行くことができる」と言われた。

主なる神の全能の力によって海が分かれ、海の底が現れ、しかもその地が乾いて、そこをイスラエルの民が歩いて渡って行けるというのである。

[17-18] さらに、主は「見よ。このわたしがエジプト人の心を頑なにする。彼らは後から入って来る。わたしはファラオとその全軍勢、戦車と騎兵によって、わたしの栄光を現す。ファラオとその戦車とその騎兵によって、わたしが栄光を現す。ファラオとその戦車とその騎兵によって、わたしが栄光を現すとき、エジプトは、わたしが主

であることを知る。」と言われる。

しかし、いったいどのようにしてであろうか。

[19-20]「イスラエルの陣営の前を進んでいた神の使いは、移動して彼らの後ろを進んだ。それで、雲の柱は彼らの前から移動して彼らの後ろに立ち、エジプトの陣営とイスラエルの陣営の間に入った」ここではこの雲の柱は神の使いの動きにともなって動くということが分かる。神の使いは神に仕え、神のために働く存在なのである。

「それは真っ暗な雲であった。それは夜を迷い込ませ、一晩中、一方の陣営がもう一方に近づくことはなかった」この雲によって昼でも夜のように真っ暗になり、そして夜になっても星も見えないような真っ暗でエジプト軍は一晩中イスラエル人に近づくことができなかつたのである。

[21-22]「モーセが手を海に向けて伸ばすと、主は一晩中、強い東風で海を押し戻し、海を乾いた地とされた。水は分かれた。イスラエルの子らは、海の真ん中の乾いた地面を進んで行った。水は彼らのために右も左も壁になった」

これはイスラエルの歴史において最も劇的な場面である。しかし、いくら強い東風が吹いたとしても、それで海が分かれるはずはない。仮に分かれたとしてもそれはものすごい勢いの風速と風圧であろう。それでそんな風が吹いているところをイスラエルの民が歩いて行けるはずがない。それゆえ、これは主なる神のみがおできになる奇跡なのである。

[23]「エジプト人は追跡し、ファラオの馬も戦車も騎兵もみな、イスラエルの子らの後を海の中に入っていった」

イスラエルの先頭はすでに向こうの地へ上陸し、たぶん一番最後尾の民が渡り終えようとしていたところ、追いかけて来たエジプト軍も海の底に入って来たのであろう。エジプト軍をさえぎっていた雲の柱はようやく彼らから離れたのであろう。彼らはなぜ海が分かれているか深く考えないで夢中になって前方のイスラエル人目がけて馬と戦車を走らせた。

[24-25]「朝の見張りのころ」これはたぶん午前3時から午前6時ごろの時間帯を指すと思われる。

「主は火と雲の柱の中からエジプトの陣営を見下ろし、エジプトの陣営を混乱に陥れ、」

これはどのようにしてかわからないが、たぶん強い稲妻や雷鳴で恐れさせ、混乱させたのではないだろうか。「戦車の車輪を外してその動きを阻んだ」外れるはずのない車輪が外れる。このような出来事の中にエジプト人たちはイスラエルの神、主の御手を見て、「イスラエルの前から逃げよう。主が彼らのためにエジプトと戦っているのだ」と叫ばざるをえなかつた。

[26-28]「主はモーセに言われた。『あなたの手を海に向けて伸ばし、エジプト人と、

その戦車、その騎兵の上に水が戻るようにせよ』(26) モーセがそのようにすると、夜明け前に海が元の状態に戻った。それで後を追って入ったファラオとその全軍勢は崩れ落ちて来た水の壁におおわれて、残った者は一人もいなかった。(27~28) つまりファラオをはじめエジプトの全軍勢はおぼれて死んでしまったのである。このような状況ではいくら泳ぎができてでもだめだったであろう。

[29]「イスラエルの子らは海の真ん中の乾いた地面を歩いて行った。水は彼らのために右も左も壁になっていた」

ここではイスラエルの最大の危機が神の介入によって、すばらしい救いの時となったことを強調するため、22節のことばがもう一度繰り返されている。

[30-31]「こうして主は、その日、イスラエルをエジプト人の手から救われた。イスラエルは、エジプト人が海辺で死んでいるのを見た。イスラエルは、主がエジプトに行われた、この大いなる御力を見た。それで民は主を恐れ、主とそのしもべモーセを信じた」

イスラエル人たちはおぼれて海辺に死んでいるエジプト人たちを見て、今こそ自分たちがエジプトの奴隷状態から解放されたことを実感したのであろう。古い世界の象徴であるエジプトはすでに海の向こうである。そして目の前には自分たちが進んで行くべき新しい地が広がっているのである。

このようにしてモーセに率いられたイスラエル人たちが紅海を渡ってエジプトから救い出されたことは、イエス・キリストを信じて、古い人に死んで新しい人にされることを象徴したバプテスマ(洗礼)を思い起こさせる。

私たちが罪の奴隷であったが、主なる神はそんな私たち人間を愛して下さり、モーセならぬイエス・キリストをこの世に送って下さり、その十字架の贖いによる救いによって信じる者を救い、永遠のいのちを与えて下さり、神の民として下さった。水による洗礼はそのことのしるしである。

イエス・キリストを救い主と信じる信仰によって罪と死と滅びから救い出され、神の民とされた私たちも、信仰をもってイエス・キリストに従い続け、この世の旅路を歩み、約束の天の御国へと進んで行きたい。→ガラテヤ3:26~29